

冬の 日 炭売の巻

—付筋と三句のわたりを中心に—

浪 本 澤 一

なに波津にあし火焼家はすゝけたれど

炭売のをのがつまこそ黒からめ

重 五

○炭売 冬の市に炭を売り歩く賤をいう。冬季。

顔も手足も黒くよごれている炭売であるゆえ、妻もさぞかし黒くよごれていることであろう。(さりながら、夫としてみれば常に愛しい妻で人の知らない楽しみのあることであろう。)

発句は、前書の示すごとく、万葉集、巻第十一、相聞(二六五一)

「難波人葦火たく屋のすしてあれど己が妻こそ常めづらしき」の歌を踏まえたものである。歌の「すし」は、煤けると同意で、古びることの譬喩に用いられている。葦火を焚く家のように煤け古びているけれども、わが妻は馴染んでいくと共に愛しさが加ってきて、それが古さを思わせななどの意である。発句は、万葉の歌の上の句を一部変えて句前に詞書として置き、歌の下の句「己が妻こそ」を句中に裁ち入れ、「常めづらしき」の意を言外の余情に抱きかかえるという、まことに手のこんだ操作を行なっている。

発句の表は、顔も手足も黒い炭売の、さぞかし妻も黒くよごれていることであろうという意であるが、それだけの意では平俗な駄洒落を弄したに過ぎず、何の風情も生じない句となる。そこに余情を添えて賤しい炭売なれど、妻は常に愛しい妻であろうと句作りしたところに俳諧としての詩も生じ、風情も揺蕩するのである。

諸注、さまざまの解を下しているが、『越人注』に「人丸の歌を取ての句也。黒からめ、炭売もおのが妻そひよかるべき也。」とあるのが句意の存するところを正しく捉えている。上掲の万葉の歌は拾遺集(巻十 四、恋四)には人麻呂の歌として出ている。『注解』が、「黒からめ」を「黒からめやは」の意と見て、思ひもよらぬうつくしきつまならめと也。」と解しているのは前書を直線的に句に繋いだところからの誤解で発句の余情にあるものは、妻に対する情愛であって、美醜ではない。

『越人注』『注解』いずれも発句に恋の心を認めている点は一致している。確かに恋の心は認められるが、それは余情として句の裏にこめられたものである。俳諧の法式として一卷の表は序の格であるゆえ、恋と

か無常とか、目に立つ意味の句は出さないのが建前となっている。かかる法式に従って表は炭売を主題とした冬季の句として作り、余情に恋の心を含ませるといふ手段を取ったと考察される。『冬の日』全巻を通じて、発句・脇はすべて冬季の句をもって始まっている。

ひとの粧ひを鏡磨寒

荷 兮

○ひとの粧ひを 他人の化粧のために。「を」は「磨く」という作用の目的を示す「に」の意であるが、語調を強めて、「を」とした。『冬の日』にはこれに似た「を」の用例が随所に見られる。○鏡磨 銅鏡の曇りを磨く職人。磨くに昔は柘榴の醋を用いた。天文九年、「守武千句」に「じやくるなりけりいのちなりけり」に「かぐみときさ夜の中山けふこえて」の付合が見える。○寒 「寒し」の約言で、冬季。明暦元年、貞徳の「紅梅千句」に「風のけぶりやすき間あら寒 季吟」の付句がある。

他人の化粧に仕える鏡磨のいかにも寒げである。(さりながら、家にはさぞ愛しい妻の待っていることであろう。)

発句を寒天の市中にひさぐ炭売と見込んで、路上に店をひらく鏡磨を対にして見せた脇句である。京伝の骨董集に鏡磨の古図が出ている。それに依ると路上の蓆の上で鏡磨が鏡をみがいており、風呂敷の解かれた道具箱と柘榴が一つ置かれてある。その前方に二人の女が描かれていてその一人は其者らしい若い女で、片膝を折ってしゃがみ、鏡の研ぎ上げるのを待っている。『注解』に「爰は職人尽しを趣向に立て脇の物好とはなしたるなり。」とある。一句の余情に、炭売と同じく鏡磨も家には愛しい妻の暖かく待っていることであろうと、懐しく言い取っている点が

蕉風の俳諧である。

『越人注』は「白氏文集、売炭翁の物を取替へて仕立たる句也。」とする。その詩は白氏文集、四、諷諭「売炭翁。伐薪燒炭南山中。滿面塵灰煙火色。兩鬢蒼蒼十指黑。売炭得錢何所營。身上衣裳口中食。可憐身上衣正單。心憂炭賤願天寒。夜來城外一尺雪。云々」を指す。

『通旨』に「師説云。商人に職人、黒からめに鏡とぐとの対付にて、鏡とぎ寒とは詞つまりて不自在、是古風のねばり也といへり。」とある。「鏡磨寒」という漢詩もどきの決った調はいまだ談林臭の濃い『次韻』『虚栗』の余臭を曳いていると見られる。

対付の脇。

花棘馬骨の霜に咲かへり

杜 国

○花棘 野ばらのこと。原野に自生し枝にとげがある。初夏に白花をつけるがここは返り花であるから季に関係はない。○馬骨の霜 原野に曝された馬骨に おいた霜。「霜」で冬季。

前句を行路の鏡磨と見立て、其場を付けている。郊原の見捨地である斃牛馬の捨場などにさしかかった時の景色と思われる。白く曝された馬骨に朝霜がおき、野いばらの花が霜を凌いで白く咲き返っているというので、景としては異常な景で、寂しさを超えて凄じさを感じさせる。前句の「寒」の語感を鋭く聞きとって凄じい景色を付けたのである。作者は杜国で、「こがらしの巻」にも「しらくくと碎けしは人の骨か何」と

いう付句をしている。かれの句は極めて個性的であって、その思い入った感対象に深く浸透し一味の妖気をさえ漂わせる。荷兮の句の特色はむしろ叙事の奇抜さにあるが、杜国のそれは抒情の生なまじさにある。発句・脇の人情から転じて一句長高く、夏季の「花蘂」を「馬骨の霜に咲きかへり」と冬季に句作りした曲節の妙は、平句と体を異にし、第三の位をよく具えている。『二弟準繩』は、第三の姿に杉形と太山の二つの作法のあることを説いている。この第三は、先ず「馬骨の霜に咲きかへり」と作って、後に名詞形の五文字「花蘂」と置いている。謂わゆる太山句法で、平句に紛れぬための仕方である。

三句のわたりは、発句・脇の人情を離れて、市中から郊原に其場を転じている。

其場。

鶴見るまどの月かすかなり

野水

○鶴 晩秋の頃に北方から渡来し、丹頂鶴、真那鶴、鍋鶴の三種がある。いちばん多く渡来したのは鍋鶴で、前二者よりも小さく、全体灰黒色で、頭と頸が白く、頭に赤い部分がある。○月かすか 光の薄れた月。秋季。表の月を短句に出している。

前句、朝霜の原野に「鶴」の趣向をあしらい、月を取り合わせた付けである。但し、「霜」を晩秋の霜と見直して、季移りを行なっている。

前句との照合から見て、「鶴」は、華麗な丹頂鶴よりも野趣をおびた鍋鶴と見ておくべきであろう。「月」は、残月、二十日あまりのかすかな

月で、晩秋の寂然たる気趣を心においてのもの。この付合に見る季移りは『冬の日』「はつ雪の巻」の「霜にまだ見る薺の食」に「野菊までたづぬる蝶の羽をれて」の付合に相似している。

前句の場にあしらった付けで、一句の体もやすらかに軽く付けている。

会釈。

かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日

芭蕉

○吹ぬ 底本に「吹ぬ」とあって、吹きぬ、吹かぬ、どちらにも読めるが、前句の静穏な移りからも「風吹かぬ」が自然に聞える。○瓶 和訓カメ。延宝八年刊、誹枕「玉だれの小瓶や通夜の一よ酒」元禄五年刊、一字幽蘭集「菊の香や瓶にもあまる水に迄 其角」

前句に「鶴見るまど」とあるより、其人を孤高の人と見込んだ付けてその手持無沙汰に「酒」は一句の趣向である。但し、千眼一統のを見を離れて、折りあしく「瓶に酒なき」と、曲節を設けた句作りにこの付句の手柄が認められる。前句の幽かな月はここでは二日、三日ごろの夕月と見るのが句情に適するであろう。秋の田野に降り立つ鶴と世外の侘びに住する孤高の人と、余情は秋の日の寂漠とした情景である。

『秘註』は「淵明酒ホシト思フ時夕暮ニ人ヨリ酒贈リタル故事」と言い、『抄』は、東坡居士の「後赤壁賦」を挙げて、「そのおもかげといふにはあらず、此等の事も思ひ寄せらるゝ逸興あるなり。」としてい

るが、ここは特に故事に依った付けではなく、「抄」の「此等の事も思ひ寄せらるゝ逸興あるなり。」の見解が当たつていよう。ただ其人の付けと見るべきである。

其人。

萩織るかさを市に振する

羽笠

○萩織るかさ 古注の多くが「萩」としているのは誤り。底本に「萩」とある。○振する 「振らす」と読む。「する」は使役の助動詞。市中に振り売りさせるの意。

前句、清貧を甘あまなう風人と見込み、「瓶に酒なき」とあるに「萩織る笠」は趣向、その笠を「市に振らす」は一句の作である。厨房に酒がされたので、酒代とすべく手織の萩笠を弟子をして市に振売りさせるとの付けである。

越人注・付合考・秘註・弁議・注解・通旨など古注の多くが「萩」と見ているのは誤り。正しくは「萩」である。この点について、何丸の『大鏡』は「一書に萩の花笠とするは非なり。萩と萩とのうつしちがいか。」と言っている。一書は升六の『注解』を指す。後の『婆心録』も「注解萩と誤つたり。」と、その非を正している。思うに、「萩織る笠」の聞き馴れぬところから、「萩」の字の崩しを見損じたことに困るものがある。

『婆心録』は「萩の葉の晒したるをもて縫ひし笠」と言っているが、その抛り所については何ら触れていない。恐らくは『冬の日』の風調か

ら観て、蘭笠・菅笠のあれば萩笠もあるべしとの例の物好きに出た俳諧であろう。次句の「胡麻千代祭」との照合からも虚の表象と考えられる。要は趣向の珍らしみを読みとるべきであろう。『冬の日』は、趣向の珍らしみを出すために好んで虚の表象を用い、後の『猿蓑』『炭俵』の俳諧に見るとき実に即いた風調とは著しく趣きを異にしている。

諸注、この付句に兼好の面影を見ている。文化三年刊行の『風雪発句撮解』は、『炭俵』の歌仙の発句「兼好も薙織りけり花ざかり」を取り上げて、「津の国天王寺のあたり、阿部野の原と云ふ所の松原のふるき所におこなひ、在家など折ふし有るにふれて、弟子閑寂、わらは命松丸を具しておこなひしが、まづしかりければ、つねの産なければ過しがたしとて、弟子わらはなどゝ物してむしろやうの物をこしらへて、京なる便りにあきなはれけり。(下略)洛西双岡麓長泉寺曳春庵の作、双岡に見えたり。」と記している。

兼好の面影をうち掠めた付けと思われる。
面影。

賀茂川や胡磨千代祭り徽近み

荷弓

○胡磨千代祭り 『越人注』に「胡麻千代・熊千代とて、隠者にて火打石売、世を渡る。狂賢事は深草の元政撰せられし隠逸伝に委し。それに祭有様に作る也。ごま千世の名を面白がりて出す句也。」とある。が、隠逸伝にかかる話は見当たらない。『七部搜』に「此祭りは上加茂の川上に稲荷の祠あり。此神の好ませ給ふとて、其あたりことごとく胡麻を植うるに、一本も枯るゝ事なし。そこで此祭りを胡麻千代祭りと云ひならはし、又千とせの社とも云ふ也。」とあ

る。然し、『婆心録』『抄』は、加茂の辺りを尋ねたが、斯る祭りの所在を知る者は無かったと記している。「祭り」で秋季。○微近み 「微」は「微」の誤字。

前句の「萩織るかさ」を祭り笠と見込み、「胡麻千代祭り」の趣向を立て、その笠を「市に振らする」とあるに、祭りの「微近み」は一句の作である。胡麻千代祭りについて確かなことは何も分かっていない。『越人注』にあるごとく胡麻千代の名を面白がって祭りの名に作為したものであろう。一句に「賀茂川や」と、賀茂の地を出したのも、この架空の祭りをさも有りげに見せるための俳諧手段と見なされる。前句の萩織るかさの鄙びた珍らしみに都はずれのその名も鄙びた胡麻千代祭りの珍らしみを取り合わせた俳諧である。要は二つの虚の表象を句いの感合を介して結合させている俳趣をこそ味わうべきであらう。

『冬の日』は趣向風情に凝りを見せた集で、その俳諧手段として好んで虚実皮膜の芸を演じる。例せば、荷兮が「有明主水」（こがらしの巻）重五が「花見次郎」（霽の巻）野水が「弁慶の宮（炭売の巻）芭蕉が「麻かりといふ歌の集」（霜月の巻）など枚挙にいとまない程である。

付けは、前句に「萩織る笠を振らする」とあるより「胡麻千代祭り微近み」と、その時節を寄せた付けである。

時節。

いはくらの賀なつかしのころ

重五

○いはくら 岩倉で、洛北の地名。北岩倉を指す。○賀 娘むこのこと。

前句「胡麻千代祭り」とあるに客待ちの心を寄せて、「賀」の趣向を立て、「微近み」の言便りに「なつかしのころ」は一句の作である。また、前句の「賀茂」に「岩倉」は名所の対付となっている。舅と姑が秋祭りに娘夫婦の到来を心待ちにしている趣きの句で、世間の人情に触れて懐かしく言い取っているところ、蕉風の俳趣である。

江森月居撰『俳諧道の便』に「名所に名所を付る事」と題して、この付合を挙げて、「是、思ひ合せし也。おもひ合する時は日の本の名所に唐土の名所も付らるゝと知べし。」と記している。

前句の時節から人情を起した付けで、其人の自の句である。両句を形の上から見れば、賀茂に岩倉、微近みになつかしの対付となっている。

起情・対付。

おもふこと布搗哥にわらはれて

野水

○布搗哥 「布搗」は、からむし等の皮で織った粗布を清流にさらし、白で搗きやわらげるをいう。「哥」は布を搗きつつ唱う歌。東京都北多摩郡調布町国領には調布を搗いた白を保存している家がある。

前句、娘が婚約の賀を慕うさまと見立を直し、ここに恋の座を設けた付けで、「賀なつかし」とあるに「布搗歌」は趣向、「岩倉」の鄙びた土地柄に「笑はれて」と響かせたのは一句の作である。

布搗歌・白挽歌・機織歌など何れも素朴な恋の情を内容としたものが多い。拾遺集、卷第十一、恋一「忍ぶれど色に出にけりわが恋はものや

思ふと人の問ふまで」(平兼盛)をこの付合と比べてみれば、「布搗歌にわらはれて」の俳趣が一入印象的に聞えるであろう。

前句の自に、其人の自を付けている。
其人。

うきははたちを越る三平マルガホ

杜国

○うき 思い煩うこと。○はたちを越る 「礼記」に「二十而嫁」とある。かかる定めにも遅れて縁遠いという意。○三平 「出額、兩頬同様にて見苦しき顔也。」(越人注)わが国ではお福のことを言う。三平をマルガホと傍訓しているのはお福の意に取つてのこと。「三平二満の口紅しなだれかゝる会釈顔」(近松、傾城反魂香)

前句「布搗歌にわらはれて」とあるに「三平」は趣向、「おもふこと」とあるに「うきははたちを越ゆる」は一句の作である。縁遠い醜女が心ない朋輩になぶられるのを、第三者のあわれにもおかしくも思いやる趣きの付けで、前句につないで恋の付けである。

前句に「わらはれて」とある、其人を他から見た付け。三句のわたりは、前句を中において、自他の振り分け。

其人。

捨られてくねるか鴛せしの離れ鳥

羽笠

○くねる 多義にわたる語であるが、ここはわが身の不遇を恨みかこつこと。パジエスの日仏辞書で Couneri, se plier, se courber. Se montrer peine, ou affligé d'une mauvaise plaisanterie dont on a été l'objet. 云々。○鴛

鴛鴦。おしどりの略。水禽で雌雄むつまじい鳥とされている。冬季。○離れ鳥 未木和歌抄、卷第十七、水鳥「霜のうへにおのが翅をかたしきてもなきをしのさよふかき声(後京極撰政)」

前に三句人情の句がつづいたので、そのねばりを緩めるために、その場の景気を詮にした付けとしている。醜女の独り居の佗びしさは鴛鴦の離れ鳥の佗びしさに切り替えられている。兩句は、佗びを心においた移り、即ち映りの感合から成っており、単なる景色ではなく、象徴的な味わいを余情としている。

『注解』に「爰は伸し句也。」とあり、『通旨』に「付は其場にて会釈也。取合せて余情あるべし。」と見える。其場の会釈であるゆえ人情の句よりは軽い。「取合せて余情あるべし」とは佗びを外言に感じさせる付合という意である。

其場。

火(お)をかぬ火燧こたうなき人を見む

芭蕉

○火をかぬ火燧 火の気のない炬燵。「火燵」で冬季。「すさまじきもの、火おこさぬ炭櫃」(枕草子)

前句「鴛の離れ鳥」とあるに、夫に死別した女人を觀じて、無常の趣きを寄せている。一句は、火の気のない炬燵の向うに今は亡き夫の面影をせつなく思い浮かべているという、すさまじいほどの情景である。打越の恋を無常に変化させている。

『二弟準繩』は、この付句に至る三句わたりの変化を説いて、「伝曰

打越は他にしてはたち越ても縁遠き醜婦也。付句より転じ来て亡人を見んといひしやもめぐらし、是自也。」としている。場の句を中にして、打越と付句は他と自の振り分けである。

其人。

門守の翁に帋子かりて寝る

重五

○門守の翁 門番の老人。○帋子 紙子。柿渋を延いた紙を揉み和らげて作った衣服で、貧者の保温の用とする。冬季

前句を落魄孤愁の人と見込み、困窮のさまを寄せた付けで、「なき人を見む」とあるに、頼むは一人「門守の翁」と趣向を立て、「火おかぬ火燵」に「帋子かりて寝る」は一句の作である。もとは富者で大きな屋敷に住み、長屋門などを持った人の、さんさんの不幸にて、妻子に先立たれ、財を散じ尽して、今は門守の老翁に紙子をかりて、冬夜の寒を凌ぐといった趣きの付けである。零落した二代目の当主と先代から仕えて移らない門守の翁であろうか。付合の懐があまりにも広すぎて、斯うこうと其の情景をひとつに搾ることはむずかしく、古注もさまざまの所見を下している。要は佗びしさを超えて凄まじいばかりの情景である。

前句の自に、其人の自を付けている。

其人。

血刀かくす月の暗きに

荷兮

○血刀かくす 血刀を拭って鞘におさめること。○月の暗きに 夜も更けて西に落ちかかった月。「月」で秋季。初裏八句目の月。

前句「門守の翁」は、町の番屋の老翁と見込み、其処をたよって「帋子かりて寝る」は、急場を遁れた「侍」と趣向を立て、「血刀かくす」と句作りした付けである。家中の若侍の類が、口論の果に相手を刀にかけてしまい、夜陰に乗じて身を晦ますさまと見える。一句の「月の暗きに」は、夜もいたく更けて月も西空に落ちかかり、その光の暗くなっているというので、前句の「帋子かりて寝る」の時分に照応させている。作者は荷兮であって、かれの得意とする狂言趣味の付けである。

前句の門守に紙子をかりて寝る、其人を他から見た付け。

其人。

霧下りて本郷の鐘七つきく

杜国

○霧 『御傘』に「降物・聳物なり、水辺にあらす。」とある。秋季。○本郷 江戸の本郷。「貞享の頃は武家の邸、寺など多くて、淋しき処なりし故此句あり。」(抄)なお「本郷もかねやすまでは江戸の内」という柳風の句はこの句より後のものである。○七つ ここは明けの七つ。寅の刻(午前四時)の鐘。前句を浪人などの刃傷沙汰と見込み、「血刀かくす」とあるに、霧の深く下りた「本郷」と、その場の趣向を立て、「月の暗きに」とある、その時分を夜明け前と定めて、「鐘七つきく」と句作りした付けである。

『注解』に「本郷はわきて武家屋敷の多くて、しかも人氣の荒き所にしあれば、其場を見定めたる也。」とある。

其場を定めた付けであるが、時分の付けともなっている。
其場・時分。

ふゆまつ 納豆たゞくなるべし

野水

○ふゆまつ 冬のせまるをいう。秋季。○納豆たゞく 納豆は元来味噌として用いる。この味噌納豆は用いるときこれを叩き刻み、菜や豆腐を加え、汁に煮てその後芥子を利かせる。但し、用いるたびに叩き刻むは不便なので、予め叩き刻んで薄平たく四角に拵えておく。これを叩き納豆という。

前句「本郷の鐘七つきく」の時分に「納豆たゞく」と趣向を定め、「霧下りて」に「ふゆまつ」は秋季を取り合わせた一句の作である。「越人注」に「納豆たゞく、早朝近き心也。夜の明行体を付たる也。」とあり、『注解』に「爰は会釈の付にして明がたの気色なり。夫を冬といひ、納豆と作りて、秋季はわづかに待の一字に持たせたるおもしろし。是ら当季より案じたる句なれば、一句に振り付けたる故人の句作を味ふべし。」とあるので句趣は尽されている。『注解』はよい鑑賞をしている。

納豆は本来僧家で作られたものであるが、次第に一般化して市に売られるようになった。『嬉遊笑覧』は「人倫訓蒙図彙に扣納豆薄ひらたく四角に拵へ細かき菜豆腐を添うるなり。値やすく早わざの物九月末二月中売に出ると有れば貞享の頃よりもさありしなり。」と記している。この付句も市に売り出す物を民家で製しているところと見られる。

前句の時分に「納豆たゞく」と、明け方の気色をあしらった付け。

会釈。

はなに泣桜の黴とすてにける

芭蕉

○はなに泣 落花を惜んで泣くの意。「はな」で春季。初裏十一句目の花。
○桜の黴 花は桜の木に生じたかびであるとの意。

前句「ふゆまつ」とあるを、万象の静寂に帰するときと見立て、「花」に寄せた観相の付けで、「納豆たゞく」の響きに「桜の黴とすてにける」は一句の作である。前句の「ふゆまつ」を季節を超えた諦念の語と見て、「桜の黴とすてにける」と、春に季を移すという、むずかしい操作を可能なものとしている。西行法師に「花にそむ心のいかで残りけむ捨てはてにきと思ふわが身に」（山家集）という名高い一首がある。この歌などに暗示を得ての作為と推せられる。付句は、まず「花に泣く」と、落花を惜む情を強く打ち出した上で、その花を「桜の黴」と観相することによって、花への執着をきれいに「捨てにける」即ち、捨ててしまったの意である。この「花」は自然の景物であると共に仏教の色即是空の「色」の意を寓したものであって、一句は、悟道見性の心をうちに含んだ観相の句である。

古来一巻の難句とされ、付合考・秘註・七部解・大鏡など「黴」の説を出しているが、「桜の黴」では語として熟さず、芭蕉にしてこのような拙劣な表現をするとは考えられない。落花の地面にへばりついて色褪せていくさまを「桜の黴」と見ることは、いささかも異様には感じられず、むしろ自然のことに聞える。『注解』は、或人の説として、「黴と

は納豆のうつりなるべし。」を引く。上に掲げた西行の歌の世界を心において見ればさして難解な句とも思われぬ。芭蕉の胸裏をうかがわせる句である。

観相。

僧ものいはず歎冬を吞

羽笠

○歎冬 小野蘭山の『本草綱目啓蒙』に「歎冬花 歎冬ハ和名鈔ニフキト訓ス。今ハフキト呼フ。葉ニハ花ヲ用フ。故ニ歎冬花ト云フ。即今冬春食用ノフキノトウヲ用ベシ。葉肆ニ莖立ノビ、已ニ花ヲ開クモノヲ乾シ俦ルモノハ用ルニ堪ヘス。古ヨリ歎冬ヲ名花ノヤマフキトスルハ其誤リ、朗詠集ヨリ出ツ。ヤマフキハ椽葉ナリ。歎冬ハ元来フキノ事ニテ山生ノモノヲ山フキト云、ヤマフキト仮名同キ故ニ混ズルナリ。山中自生ノモノハ葉小ニシテ苦味多シ。家園ニ栽ルハ葉大ニシテ苦味薄シ。歎冬、万病回春」とある。『薬学大辞典』（平凡社）には「歎冬、支那原産の多年草で欧米及びシベリア地方に自生し本邦には産しない。葉は根生、長梗、心臟形で多角様歯牙縁、下面に短毛を密生する。初春葉に先じて単性花を頂生、頭状花は鮮黄色である。生薬としての歎冬花は未開の花頭を採集し乾燥したものである。歎冬葉は葉を採集乾燥したものである。本品は気味緩和、微に苦く粘性性である。歎冬に本邦産フキを充てるは誤りである。その用途として、花及び葉は鎮咳薬として浸剤を用いる」と記す。邦俗「歎冬」を路に当てたことがわかる。俳諧の法式書である『御傘』には「葉の名に歎冬と云は路のとうの事也」とあり、『本草綱目啓蒙』の「葉ニハ花ヲ用フ。故ニ歎冬花ト云フ」とあるのと同じである。『薬学大辞典』に記すところの支那原産の歎冬と本邦産の路は同じく菊科植物ではあっても属性を異にするものであるが、歎冬・歎冬花の漢名を路・路のとうに当用するに至ったのである。俳諧の季は歎冬を路のとうとして春季とする。

前句を妄執放下のさまと見込んで、「桜の儼とすてにける」とあるに

「僧ものいはず」と、僧の趣向を定め、「はなに泣く」とある、花に春季を合せて、「歎冬を吞む」と句作りした付けである。一句は、僧が咳を鎮めるために歎冬の煎薬を苦そうに黙りこくって飲むさまと解される。『薬学大辞典』（平凡社）のフキの項に「嫩穂（フキノタウ）は本植物の花穂を採集したもので、それは民間で鎮咳の効があるとされている。」と記す。支那原産の歎冬花と同様に路のとうも、その乾したものを煎じて鎮咳薬として民間で用いたことが明らかである。

この句の「歎冬」については古来諸説あり、注解・弁議・通旨・抄など山吹としている。その誤りであることは『本草綱目啓蒙』の記述に徴しても論の余地はない。中国原産の歎冬を日本の路に当てているので、山路とするならばそれなりに意は通じるが、名花の山吹とすることは明らかに誤りである。寛永十九年板『鷹筑波』の発句に「春の部の末にはいかに歎冬花」「年の内に出るや古今のくはんとう花」とあり、上記の付けも歎冬はクワントウと音読したことは間違いない。

前句を自の句として、其人を他から見た付けである。
其人。

白燕濁らぬ水に羽を洗ひ

荷弓

○白燕 「白」に神性を付与して祥瑞の靈鳥とした燕。白雉・白鳳・白鹿・白雁などと同類。『漢武洞冥記』に「漢元鼎之間、招靈閣有_二神女_一。留_二玉釵_一。帝以賜_二趙婕妤_一。至_二昭帝元鳳中_一、猶見_二此釵_一。宮人謀欲_レ碎_レ之。明日視_二釵匣_一唯見_二白燕升_レ天_一。」と記す。『日本書紀』天智六年に「夏六月、葛野郡より

白き鷗（つばひらく）を翫る。」とある。

前句を聖胎を養う老僧と見立て、「歎冬」とあるより幽谷に住む「白燕」をあしらった、其場の付けである。白燕は遠く俗界を離れた仙境に住むという霊鳥としてのものであるが、「濁らぬ水」と断ることによって、その清浄感をひとしお高めている。静寂な山院に聖胎を養う老僧と幽谷に羽を洗う白燕とが清らかな感合において相映発している詩趣を味わえば足りよう。

『越人注』に「白燕、作り物也。只清き心を付けたる句也。」とあるごとく、作者のヴィジョンによって付け出された霊鳥である。『冬の日』は趣向風情の華かな集で、その手段として好んで虚の表象を用いることは既に言及したところである。『通旨』は「付意は其場にして色立也。」とする。色彩の取り合わせと見られぬことはない。

其場。

宣旨かしこく釵を鑄る

重五

○宣旨 勅命を下達すること。「内侍宣旨承はり伝へて、大臣参り給ふべき旨あれば、参り給ふ。」（源氏、桐壺の巻）○釵 髮刺の音使。「釵留一朶、合一扇」（白氏、長恨歌）○鑄る 金屬を溶かして鑄型に流しこんで造る。

前句、白燕の現われるを祥瑞と見立て、聖代の慶事を寄せた付けである。『漢武洞冥記』などから着意して、「白燕」から「釵を鑄る」の趣向を定め、「宣旨かしこく」は一句の作である。帝のご慶事が触れ出され、工匠が宣旨を畏んで、入内の妃の頭に飾る釵を鑄る業に心魂をこめ

るとの意である。前句より四句は漢代の小説に見える神仙談、あるいは宮闈の情話を主題としており、この付けも然うした趣きのもと見られる。

前句の気色から入情を起した其人の付けである。三句のわたりは、前句の場を中にして、打越の他に自の振り分けである。

其人。

八十年を三つ見る童母もちて

野水

○八十年を三つ見る 古來この語については、越人説の二百四十歳、成美説の七十三歳、露伴説の八十三歳、樋口説の二百八十歳、また老萊子の面影とする説、東方朔と西王母の面影と見る説など、諸説紛々として定まらない。私見は前句に寄せて、千代もと願う賀の心を述べた付けと見て、『越人注』の「二百四十年生きて、童顔のごとく若き人、母も有故勅使立心也」とあるを採る。

前句、帝即位に際し、后妃の釵を鑄るというに、千代もと願う賀の心を向付にした句である。一句は、国を挙げての慶事に招待された長寿者には、齡二百四十歳に達して、なお母持ちという寿福者もいたそうなどという俳諧である。わが国の古歌に徴しても、賀の歌は千歳万歳を願う心を詠むをもって型としており、この付けにおける二百四十歳を、大げさであるとか、誇張に過ぎるとかいった批評は筋違い、場違いの論であって当たらない。

然らば何を抛り所にして、「八十年を三つ見る」としたかと言えば、八十は数の多きを意味する語であるところから、人間長寿の八十年をさ

らに三倍したほどのめでたい高寿と言ったまでの俳諧であって、それ以上の抛りどころが特にあるわけではなからう。

二百四十歳説に対するものとして七十三歳説がある。これは夏目成美の『随齋諧話』に依るもので、参考のため本文を引用すれば、「東国の語に七十三になれば八十年を三つ見るとはいふ也。さてその老人にいまだ母あれば、わらはとはいふならん。たとへば五十二になれる者の、六十をふたつ見たり、六十五になれるもの、七十を五つ見たりなどいふ。甲斐国などにて常にいふ事なりと、かの国人のものがたりなり。……」と記す。然し、この説は聞き書きに過ぎず、かりにそれが事実であったとしても、野水の手に成るこの付句の作為を東国のかかる俗言に直結して考えることはあまりにも短絡的である。なお視点を移して言えばこの付句の前後には「白燕」「七夕のつま」のごとき現実を超えた趣向が目立ち、古典を背景においた浪漫的風調を色濃く出している。後の『猿蓑』『炭俵』に見るごとき地に着いた写實的風調とは著しく趣きを異にしており、この付句を現実在即して見ることの非なるを痛感させる。

付けは別人を立てた格で、宮廷の慶事に高寿者の母子を対させた向付。三句のわたりは、前句を自と見て、場と他の振り分けである。

向付。

なかだちそむる七夕のつま

杜 国

○なかだちそむる 底本に「だ」と濁点を振る。仲立をし初めるの意。○七夕のつま たなばたは棚機で、織女のことであるが、産星と棚機つ女の総称となり、また、そのどちらかを指す。「七夕のつま」の「つま」は、妻、夫のどちらにも用いられるが、ここは織女の意。「七夕」に秋季を持たせて、七夕の妻と言った。

前句を天界の神仙と見込んで、七夕の秋季をあしらった寓言体の付けである。思うに前句に西王母の面影を見取っての俳諧と推せられる。一句の意は、初秋七月七日、彥星（牽牛）に棚機つ女（織女）を妻合わせ、その仲立をし初めるといっているので、それ以上のことはすべて余情として想像に任せるといふ句作りをしている。その余情の世界に在るものは漢代の小説の西王母と東方朔の怪奇な神仙談であって、当代の小説は架空のお伽噺のごときものに過ぎない。逆に言えば、そうしたお伽噺に俳諧の興を見出しているのがこの付句であると思えばよい。趣向の珍奇をよるこぶのは『冬の日』の俳諧の著しい特色で、このあたりの付合にはそれが色濃く出ている。こうした理由からこの付句の余情としてある西王母と東方朔のことに触れておくことにする。

漢の武帝は、英邁な君主であったが、後には神仙怪奇の説を迷信し、仙術を行なう方士を寵遇したと言われる。漢武内伝、漢武故事などに見える怪奇な神仙談は武帝の宮闈を巡って展開されているのである。武帝が、そのお伽衆ともいべき東方朔を異人と知ったことは漢武故事に「指朔謂上曰、王母種桃、三千年一結子。此兒不良、已三過儻、失三母意」。故被謫来此。上大驚、始知朔非世中人。」と記す。

謡曲、協能物「東方朔」は、初秋の七日、七夕の星祭りの日、仙界に

住む東方朔の導きで、既に齡九千歳に及ぶ西王母が御殿に参内して、仙薬の桃実を帝王の上覧に備えるという物語から成っている。その文中に「三足の青鳥、翅をならべて飛び廻り、姿も妙なる王母の出立」とある。この鳥の名は山海経の三青鳥から出ている。この三青鳥が、神異経では崑崙山にいる希有という大鳥と化しており、西王母は毎歳その翼上に登って東王公に会すという話になっている。塩谷温述、支那文学概論講話は、七夕の鵲かきせのわたせる橋はかかる話から出たのであろうと言う。

大言海「カサさぎのはし」の項目に「烏鵲くわく埴は河成は橋而以度は織女は」（白孔六帖）とある。夫木和歌抄、七夕の歌群の中には「七夕のあまの川もりこころあらばかへさわたすなかささぎの橋」「あまのがはたえぬちぎりのわたりとやはねをかはせる鵲の橋」のごとき歌が散見する。

漢代の小説の神仙談がわが国の文芸に及ぼした影響を背景において、この付合を見ると、七月七日、鵲の橋を渡って二星が逢ひ初める、その仲立を王母が取り持つという俳諧もおのずと黙会でできるであろう。

付けは七夕の秋季を寓言体にした会釈の付けで、三句のわたりは、自に他の向い、他のあしらいとなっている。

会釈。

西南に桂かづらのはなのつぼむとき

羽 笠

○桂のはな 支那の伝説に、月中にあるとする木。「月桂高百丈」（唐、段成式、西陽雜俎）秋、この桂の紅葉するを「花の桂」といった。「七夕のあかねわかれのなみだにや花のかつらもつゆけかるらん」（金葉集、秋）但し、詩歌

ともに桂の花とは言わない。支那で桂花は木犀のこと。この付句に「桂のはな」とあるは例の俳言であり、月という意。秋季。名残表十一句目の月を五句目に出している。○つぼむ 七日の月のいまだ若いのを「はな」の縁語として「つぼむ」と言った。

前句に二星を交会させるとあるより、その時分を寄せた付けである。

「七夕のつま」とあるに「桂のはな」は趣向、「なかだちそむる」とあるに「西南につぼむ」は一句の作である。七日の月は上弦半開で、宵のうち西南に現われ、十五夜の月をはなの満開とすれば、七日頃の月はまさに花の苔みと言えよう。兩句照合して天上界の漂渺幽艶な情趣を感覚的に具象して見せている。『通旨』に「七夕の時分を以てつけたり」とする。

時分。

蘭のあぶらにしるぎト木ぎうつ音

芭 蕉

○蘭のあぶら 「蘭」は季吟の『山の井』に「ふぢばかま」とある。藤袴は香草として古くから賞でられた。淵景山の『陸氏草木鳥獸虫魚疏函解』に「蘭に真蘭幽蘭あり。詩経楚辭などに詠ずるは真蘭なり。和名ふぢばかまを云。今時花を賞玩するは幽蘭なり」と記す。蘭のあぶらの「蘭」は、その香を賞でての文飾であって、良質の油という意。植物油は、菜種・胡麻・胡桃・椿の種などから採る。○ト木うつ音 「ト木」は縮木。「うつ」は、油を搾るとき蒸した油種を木格子の中におき、縮木を大槌で打ち、その油を搾り取る。

前句に宵の時分を聞きとって、市人が家業に精を出す、其場を付けている。「桂のはな」とあるに「蘭のあぶら」は前句の位を匂わせた趣向「つぼむとき」とあるに「うつ音」は前句の拍子に乗った一句の作であ

る。宵空に薄暗く上弦の月が照り、秋の夜は長いので、夜をかけて油搾りをする木槌の音が聞えてくるという意である。

尋常の油とせず、蘭の油としたのは例の趣向の凝りである。『文選』に「蘭英之酒、酌以滌_レ口」(漢、枚叔、七発八首)とあるのと同じで、上等の油、上等の酒と解しておけばよい。

其場。

賤しつの家に賢なる女見てかへる

重五

○賤の家 貧しい家。○賢なる女 貞賢な女の意。

前句「蘭のあぶら」とある蘭香に「賢なる女」は趣向、かかる女を「賤の家に見てかへる」は、前句を富家と見込んだ上での一句の作である。蘭膏を搾る富家の近くの小家に、近郷に聞えた貞賢な女のあるを、他目よそめに見て帰るとの意である。詩経や楚辞は蘭を君子賢人の寓意に用いており、かかる例は珍しくない。ここもそれで、前句の「蘭」に「賢なる女」は句いの感合と言える。前二句、時分、場と会釈の句がつづいたので、人情を起した付けをしている。

以上の解の大体は『注解』『抄』の説を参照した。然し『注解』が「秋風辞に、蘭有_レ秀兮、菊有_レ芳。懷_レ佳人兮不能_レ忘矣。かかる所をより合せて賢女とは付けたるべし。」とすることには疑義がある。漢の武帝の「秋風辞」には序があつて、「上行_三幸河東、祠_三后土。顧視帝京欣然。中流与_三群臣飲燕。上歎甚。乃自作_三秋風辞曰、」とあり、辞中の佳人は群臣の謂で、忠あるによって忘れずとの意において用いら

れている語である。

『越人注』に「蘭の油しぼるは賢女也。」と見、『弁議』に「木うつ家ならん。」と見るは、次句との関連においておもしろくない。賢なる女が、木を打ち、釣瓶の粟をあらうとなり、打越から三句同一人という事になって変化の上からおもしろくないのである。前句の場に別人を対した起情の付けと見ておくべきであろう。

起情。

釣瓶つるべに粟をあらふ日のくれ

荷兮

○釣瓶 吊ぶ釜の義。井水を汲んで釣り上げる桶で、繩あるいは竿の先につけて釣り上げる。○粟 五穀の一つで、味の淡いところからの名。夏粟と秋粟とあるが、ここはその何れとも限らず、雑の句として扱ふ。粟は、糝飯とし、また餅もちに搗く。

前句に「賤の家に賢なる女」とあるより、「釣瓶に粟をあらふ」と、其人の用を趣向し、「見てかへる」とあるに「日のくれ」と、その時分を響かせた付けである。一句の助詞「に」の用法には問題があり、古注もさまざまの解をしている。然し、釣瓶の中で粟を洗うといった意ではなく、柄杓ひしゃくを用いず、釣瓶で汲み上げた水をそのまま使つて粟を洗うという意で、貧家の女の井戸端での手業てわざを言ったのであろう。

『越人注』に「聞えたる通也。是等今の人なお不快など申べき句也。然共事替り、当句と前句と一所にからみ、見る句也。」とあるは、前句を受けての付筋が一貫して、しかも前句に搦み付けにしている点を

当流にあらざると非難したと考えられる。付筋は、前句に賢女を「見てかへる」とあるに、その時分を「日のくれ」と響かせた付けと見る他ない。

時分。

はやり来て撫子かざる正月に

杜国

○はやり来て 大疫天災のあった年、元日の祝いとは別に、祝い直しの俄正月を行なった。その俄正月が在々所々に流行してきてという意。俄正月は、流行正月・触正月とも呼んだ。西鶴、武道伝来記四、巻一「嗒嗒といふ俄正月」の条「天正の比陸奥若松に五月のすゑ大あられふりて、板屋の軒端はあれて、東に不破の関屋見せける。其丸雪しばし消えもやらず。秤にかくれば八匁五分六ト有といへり。云々」とあって、「其後鹿島の事ふれや告げ来りけむ。此六月初日を正月になして祝ふべし。さなくば人間三合になるべしと。愚痴の世をはかりて神託とおどしければ、智あるも死ぬ事を好く人はなく、女子どもの身の上を思ひ、餅花に春をさかせ、千代もと祈る松立て飾り、礼者は帷子を著たるばかり、その外は元日にすこしも変る事なし。」○撫子 「瞿麦、和名奈天之古」（本草和名、上二九）「なでしこ 植物也。夏也」（産衣）山野に自生する多年草で、花の盛りは春から秋に渡るので、常夏の異名を持つ。また、その花形の小さく愛すべきところから、子に擬して言う。

前句、餅に搗く粟を洗うと見込み、俄正月の趣向を定め、その祝いに「撫子かざる」と句作りした付けである。上に引用した西鶴の文章に、俄正月も元日と少しも変ることなく、千代もと祈る松を立てて飾ったとある。付句に、松と言わず、撫子を飾るとしたについては、この花の盛りが長いので、常夏の異名を持つところから、千代もと祈る賀の心を寄

せての作句と推せられる。それに就いては典拠とすべき古歌がある。万葉集、巻第十九（四二二一）に「時に、雪を積みて、重なる巖の起てるを彫り成し、奇巧に草樹の花を採め発く。此に属きて椽久米朝臣広縄の作れる歌一首」と前書して、「瞿麦は秋咲くものを君が家の雪の巖に咲きにけるかも」とあり、この歌に和して、（四二三二）に「遊行婦蒲生娘子の一首」として、「雪の鳥巖に植ゑたる瞿麦は千代に咲かぬか君が挿頭に」とある。宴席に召された遊行婦が、広縄の歌を受けて、その家の主を賀したものである。この後の歌が、夫木和歌抄、巻第九、夏部三、瞿麦の項に「ゆきしまの岩ほにおふるなでしこは千代にさきぬる君が挿頭に」となつて出ている。同じく瞿麦の項に「よろづ代の岩ねにねざすとこ夏にいとど常盤の松ぞおひそふ」の詠も見える。何れの歌も撫子を祥瑞の花と見なして千代もと祈る賀の心を託して詠んだものである。

付句に「撫子かざる」と言ったのは、以上のごとき典拠のあることで松に代えて撫子を飾り仕直しの正月を祝うとの俳諧と推せられる。諸注俄正月に撫子を飾ったという例証を挙げていないところを見ると、作者杜国の創意に基づく虚の表象と推せられるが、その作為の根底には典拠があるので、実感を伴なうものとなっている。尚、この愛すべき花を俳諧に活用して一味の懐しみを匂わせている手腕は尋常一様のものではなく、この作者のすぐれた詩人的資質を偲ばせる。

因に、『奥の細道』には、芭蕉に随行した曾良の句として、「かさねとは八重撫子の名なるべし」という抒情味豊かな一吟が出ている。然し

撫子は淡紅五弁の花であつて、これまた虚の表象と見られる。蕉門の俳諧は、機に應じて、例えば虚空に五彩の虹を懸けるにも似た幻術を素知らぬ振りに演出して観せるのである。

付けは前句に寄せた時節の句である。

時節。

つゞみ手向る弁慶の宮

野水

○つゞみ手向る 底本に「つゞみ」と濁点を振る。鼓を打って神に奉獻する。
○弁慶の宮 諸説あるが、何れも臆説の域を出ない。

前句の「はやり来て」を俄正月の辺土までもはやり来てと見立て、「弁慶の宮」は趣向、「撫子かざる」に「つゞみ手向くる」は一句の作である。弁慶の宮を義経伝説の諸地に残る陸奥の辺土と仮想しての付けと思われる。「越人注」に「べんけいの宮、作り物也。然共朝鮮に朝比奈の宮、賀茂の岩本・橋本は業平・実方などを祭るごとくなると思ひ合せ可_レ見。」と言ひ、いかにも在りげな宮とだけ見ておけばよいとしている。このいかにも在りげに思わせるところが謂わゆる虚実皮膜の芸のおもしろさで、そこに着眼しての俳諧である。

古注、この付けを其場と見ている。が、唯の場の句と見ず、「つゞみ手向くる」其人の付けとする。

其人。

寅の日の旦を鍛冶の急起て

芭蕉

○寅の日 十二支の第三位。音はイン。生物の虎に転義して、トラと訓む。
「寅は泰の卦に当り、陽氣盛にして、武にふさはしき故に、かりそめに取用るしならむ」(抄)

前句の場から人事を起した付けで、「弁慶の宮」とあるに「鍛冶」は趣向、「つゞみ手向くる」とあるに「寅の日の旦を急起きて」は一句の作である。弁慶の宮は名だたる武神を祭る宮であるゆえ、利劍を鍛えにかかる鍛冶の早朝に参詣して心願の達成を祈念するさまの付けと解される。

一句の「寅の日」については確説がない。例せば『弁議』に「神楽などある日と見て詣するの付なり。寅の日は其宮の詣日なるか。又鍛冶の用ゆる日なるか。且劍を作るに祈るべきやうの神なり。」とあるごとく臆説を出ない。然し、『大鏡』は『注解』が「寅の一字は朝起の響なるべし。」と見るを難じて、「寅は猛獸にして風を司る。故に寅の日を祝ふは刀工の常なるべし。寅年寅月寅日に打たれたる刀を三寅と号して、伊豆権現に納めたりしと也。さすれば寅は一句の眼也。」と言ふ。『抄』は、この説を疑ひ、「三寅の太刀、伊豆権現に納まりしなどいふ事、確説にもあらず、有名鍛工水心子の玉函などにも寅の日の説無し。」とする。思うに、「寅の日」に確たる故事などあるわけではなく、唯是れ芭蕉の詩神より出たヴィジョンであるう。余言ながら、世阿弥の能、「老松」は神物であつて、その詞章に「この松蔭に旅居して、風も嘯く

寅の刻、神の告げをも待ち居たり、神の告げをも待ち居たり。」とあり、「空澄み渡る神神楽、歌を歌ひ、舞を舞ひ、舞楽を供ふる宮寺の、声も満ちたる有難や。」とある。芭蕉の着意にはこの能の作用が見られないであろうか。即ち、「風も嘯く寅の刻」から「寅」の一字を直観し、「寅の日の朝」と換骨した句作りと見るは見過ぎであろうか。

付けは、弁慶の宮に詣でた鍛冶、その人の付けである。但し、前句を自として、その人を他から見て付けている。

其人。

雲かうばしき南京の地

羽笠

○雲かうばしき 「かうばし」は香細しの音便。雲の句やかな意で、南京の褒め詞。「かうばしう愛には何やら野べの色」（談林十百韻、下涼みの巻）○南京 京都を北京というに対して奈良を南京と呼ぶ。○地 古くは土地のことをツチと言った。「大空より人雲に乗りておりきて、つちより五尺ばかり上りたる程に、立ち列ねたり」（竹取物語、天の羽衣）

前句に鍛冶とあるより鍛工の軒を連ねる「南京」と、その場を定めた付けである。一句の「雲かうばしき」は、枕詞のごとく南京に冠せられた褒め詞であるが、前句の「且」の移りでもあって、南都の朝空の句やかに輝くさまである。また一句において、「地」をツチと訓むは、刃物の焼入れには焼刃土と言つて必ず刀身に土を塗るところから、前句の「鍛冶」からの移りで見られる。薫風の付合は句いの感合を基調としており移りは即ち映りでもある。

『大鏡』は、『注解』に「此句は鍛冶といへるより呉の干将を思ひ寄て南京の地とは付たらん。南京もと呉地なれば也。」とあるを非として、「高野剃刀、奈良刀、奈良に必定せり。」とする。何丸の言うごとく南京は奈良と見るべきで、前句に異国を呼び出すほどのものは何も感じられない。

三句のわたりは、前句の他を挾んで、自と場の振り分けである。其場。

いがきして誰ともしらぬ人の像

荷兮

○いがき 忌垣。斎み垣。清浄な垣の意で、神社の垣をいう。瑞垣・神籬に同じ。○人の像 祭られている人の像。

前句に南京とある、其場に一小祠をあしらった付けである。奈良は千年の古都であるゆえ、東大寺・興福寺など大寺名刹の数々あるのに、一眼一統の見を離れて、ことさらに世に埋もれた一小祠を付けているところがこの句の眼目である。一句は、その情景を「いがきして」と懐しく言いとり、「誰ともしらぬ人の像」と、一味の佗びしさを添えるものとしている。この幽かな佗びが薫風の俳諧であって、その像の誰なるかを尋ねることはさらに無用の詮索というものであろう。芭蕉晩年に「菊の香や奈良にはふるき仏たち」の秀吟があるが、この荷兮の付けは、それとはまた趣きを異にして、古都への郷愁をそそる余情を内在している。俳諧連歌のおもしろさを味わせてくれる付けと言えよう。因に、この付けと視角を同じうする句として、芭蕉に「春なれや名もなき山の朝霞」

(野ざらし紀行)の名吟のあるを思い起させる。

其場の会釈。

泥にこゝろのきよき芹の根

重五

○芹の根 芹は、早春の節、その根の香氣あるを賞味するので、根芹ともい
う。春季。

前句、俗世間とは無縁にひっそりと齋か^いれている像と見立て、その場
を会釈った付けである。その小祠は荒れるままに放置されているのと異
なり、ささやかな忌垣を巡らして、清らかに齋かれて在る。一句は、か
かる前句の匂いを早春の芹の香に移して、「泥にこゝろのきよき」と句
作りしたのである。二つのイメージが匂いの感合によって不即不離に結
合している点を味わうべきであろう。

闌更の『俳諧七部解』(未完)に「其場のあしらひにて、心のきよき
も前句の匂ひなるべし。」とあり、『秘註』も「其場ノ付」とする。

其場の会釈。

粥すゝるあかつき花にかしこまり

やすい

○花にかしこまり 花にむかって端座すること。「花」は桜の花。春季。名残
裏五句目の花を繰上げて出した。

前句に「泥にこゝろのきよき」というより、隠士の境涯を起した付け
である。一句は、その人にふさわしく、食も淡泊に「粥すゝる」と言い
起居も「あかつき花にかしこまり」と、清閑なたたずまいを具象してお

り、隠君子の日常を彷彿させるものがある。

名残裏の花を繰上げて出したところから見、後にひと波瀾来るを予
想させる。蕉風の俳諧は、詩趣の活動を中心においているゆえ、機に応
じては名残裏の花を繰上げて出すことも躊躇なく実演しているのでは
ある。

前句の場から呼び出された其人の付け。

其人。

狩衣の下に鎧ふ春風

芭蕉

○狩衣 公卿・殿上人の寛ぎの服で、狩に使用したところからこの名がある。
○鎧ふ 具うの意。簡略な鎧の腹巻を狩衣の下に具うの意。腹巻は、袖もなく
草摺の幅も狭いので、衣の下に着ても肩や裾の張ることがなく、起居に軽便で
あり、狩衣の下に着た。関根正直の『装束図解』に「公家衆の軍装には、大か
た狩衣水干などの下に、此の腹巻を着たりと見ゆ。」とある。「妙法院の宮は、
すどしの御衣の下に、萌黄の御腹巻とかや着給へり。」(増鏡、第十五、むら時
雨)○春風 春吹く風の駘蕩たるをいう。春季。

前句に「粥すゝる」とあるを陣中連歌の席と見立て、「あかつき花に
かしこまる」其人の姿を表わした付けである。治乱常なき戦国の世を背
景においての句であろう。陣中の貴人が狩衣の下に腹巻を具うた体であ
るが、前句の「花」を受けて、「鎧ふ春風」とあるゆえ、緊迫した場合
ではさらになく、陣中おのずから閑ある体で、攻防野戦の合間に花下の
連歌を楽しむさまと見える。

弁議・注解・通旨・抄など、諸注の多くが出陣と見ているのは、次句

に迷わされての性急な解であり、変化の上からも甚だおもしろくない。

『評注』は「前句をよしの宮などゝ見て、めいめい暁の粥にむかふるさまを、軍の出立にはあらねど、おだやかならぬ世なれば、かりにも物の具をはなたず、狩衣の下にもうちよろひたるすがたなり。」とする。出陣と見ていないところはさすがであるが、前句の「花」を吉野と見ただけの微音的な解に終っている。『秘註』は「軍陣ノ連歌」と見ている。連歌の席に粥を用いたことは、延宝四年刊『類船集』にも、粥の条に「病人・大師講・正月十五日・連歌・時齋」など、その行事を挙げた中に連歌を入れている。

南北朝時代は公家・武家・僧俗を通じてひろく連歌が流行し、当時代の武将たちは、長陣となったような場合、連歌を催して陣中の座興としたのである。太平記はそれらのことを記している。文和五年（一三五六）二条撰政良基の撰した『菟玖波集』には後醍醐院・夢窓国師・佐々木道誉・足利尊氏など著名人の連歌が数多く採録されている。

付けは、前句を自と見て、其人の自の付けである。

其人。

北のかたなくく簾おしやりて

羽笠

○北のかた 正殿の北の対屋を居所とするところかの称。北に住むお方の意で公卿その他身柄ある人の妻にいう。○簾 實垂の意で、母屋や廂の間の周囲に垂れる。

前句を公達などの出陣と見立て、別離のさまを向いにした付けであ

る。一句は、北の方が、別れを惜んで泣きながら端近く出て、簾を押しやって、夫の門出を見送るさまである。前句の、狩衣の下に腹巻を具うは貴人の軍装で、治承・承久・建武といった戦乱の世には、この付合に類した面影は幾つともなくあり、誰の面影と定めての付合ではない。が平家の公達である敦盛・重衡などの面影を寄せてみれば、まだうら若い北の方の別離の情もまた一入なものがある。物語の絵巻を見るときに上手な付句である。

『通旨』に「前句を出陣と見たる向ひ付にて、北の方のわかれをおし、すだれをおしやり給ふ佛画くがごとし。源平の盛衰、元弘建武の変動にかゝる姿情は多かるべし。師説に前句とも巻中の秀逸といへり。」とあるは適評と言える。

付けは、別人を立てた格で、出陣の公達に北の方を向付にしている。

三句のわたりは、自・自・他の向いである。

向付。

ねられぬ夢を責むら雨

杜国

○責むる ここは、なやますの意。○むら雨 間をおいて降り過ぎる急雨。『去来抄』故実に「村雨。急雨と書て、畢竟、一陣の雨なれば、其風情能くうつつ得ば、いつをかぎるまじ。無季なるもかゝるゆえにや。」とある。

前句の余情をあしらった、其人の付けで、「北のかたなくく」とあるに「ねられぬ夢」は趣向、「簾おしやりて」に「責むるむら雨」は一句の作である。前句と合して北の方の独り寝の侘びを言い得た見事な挙

句とされている。『七部集連句早見』は前句と共に恋の付けに分類する。打越を離れ、前句と結んだ恋の句と見るべきであろう。

歌仙三十六句、最後の二句は和氣ある句をもって穏やかに挙げるを常則とするが、この巻は、悲愁の情の濃い、侘びのふかい句をもって挙げるといふ、破格中の破格を演じている。それは既に名残裏三句目に「花」の句が繰り上げて出され、その付句「狩衣の下に鎧ふ春風」は、陣中の句ながら、軽く挙句の体に作られているに因る。芭蕉一門の俳諧は、法式に縛られず、法式を自在に支配しており、この巻の名残裏の運びのごときは、かかる蕉風の精神を遺憾なく發揮した巻として注目に値する。

名残裏五句目と六句目について、『注解』は「二句一意の付かた也。」とし、『秘註』も「物思ヒノ形。カラミ付ナリ。」とする。江森月居の撰した『俳諧道の便』付合の部に「二句一意は前句に云残したるをかく近く付くるなり。さなくては付かぬものなり。」と説いている、この付合はまさにそれに当たるといふ。

付けは、其人。三句のわたりは、自に他の向い、他の会釈である。其人。

(炭売の巻、終り)